

今号の内容	ページ
年頭あいさつ(市長、議長)	2・3
六合校区に学童保育所を開設	4
柳川雛祭り さげもんめぐり ほか	5
我がまちこの人(荻島香織さん)	6
「清水山もみじウォーク」は大盛況 ほか	7



合併して初めての「柳川市ロードレース大会」(市教育委員会など主催)が12月18日、三橋グラウンド周辺で開かれ、小学1年生から一般まで941人が参加して健脚を競いました。

学年と男女ごとにスタート。小学生の部では我先にと前に出ようとして転倒したり、靴が脱げたりするハプニングも。グラウンドを1周半して一般道へ出ると、誘導する体育協会役員などから「がんばれがんばれ」「もうちょっと」

寒さに負けるな

市ロードレース大会

と声をかけてもらいながら、元気に走りました。この日はこの冬一番の寒気が訪れ、朝の気温は零度近く。時折小雪が舞う中、参加者は保護者などの声援を受け、顔を真っ赤にしながらか次々にゴールしていました。(成績は18ページ)

新 市史抄片 10 安政のコレラ流行



コレラの記事が記されている用人の日記

現在、我が国では新型インフルエンザの流行に対する警戒がなされています。この新型インフルエンザだけではなく、この数年の間にサーズ(SARS)、重症急性呼吸器症候群)など今まで知られていなかった病原体が、わたしたちの生活を脅かしています。実は、江戸時代にも未知の病原体によって日本人が脅威にさらされたことがありました。その一つが、安政五年(一八五八)のコレラの大流行です。このコレラは、同年五月に長崎に入港したアメリカ艦によってもたらされたとされて

います。コレラは九州から北海道まで全国的に波及し、その死者は数十万人にのぼったと言います。柳川においては、どうだったのでしょうか。藩主の秘書官である用人の日記を見ると、安政五年八月十二日条に「長久寺(本城町にあった真言宗寺院。明治二年廃寺)で悪病流行についての祈禱が行われているのが、コレラ関連の最初の記事です。同月二十二日までの藩の調査によれば、死者は五百二十四人、罹病者は六百九人でした。ある寺の記録には、「村々城下こりこり」と即死致す者その数を知らず」と、当時のコレラの呼称であるコロリに懸けて表現されています。さらに、同じ記録には沖端と中島の死者が他より抜きん出て多いと記されており、コレラが長崎などから港湾部を経て領内にもたらされたことを如実に示しています。

気の話ばかりであったようです。流行は、同年九月に一端終息するかに見えましたが、翌六年六月初旬頃より再流行を始めます。安政六年の病状は前年に増して深刻で、「朝の五つ時より煩い掛かり候えば、すでに同日暮れ六つ当たりには落命」(午前八時に病気に罹ると、午後六時頃には亡くなる)と記されています。七月末頃の集計では、死者が八百二十九人、罹病者が千三百三十五人となっています。記録からは、前年には死者・罹病者がほとんどいなかった領内奥地にまでコレラが波及していったことが窺えます。藩もただ手をこまねいていたわけではありません。安政六年七月に普段は藩主の診察を行う御相伴医を領内各所へ派遣、大庄屋(約二十か村を単位とした組を管轄)宅に村医者を呼び集めて、薬の処方協議し、薬を与えます。しかし、近代的な治療法や衛生観念のなかった当時においては、その効果はどれほどあったのかわかりません。ともかく、ようやく十月には柳河藩領内のコレラ流行は終息を遂げたようです。

市史編さん係 白石直樹

人のうごき

平成17年11月末現在

人口	75,862人(前月比-40)
男	36,015人(-16)
女	39,847人(-24)
出生	40人、死亡 60人
転入	125人、転出 145人
世帯数	23,984世帯(+14)

先月からやりたい放題の1歳の息子。今度は私のメガネをポツキリ。半日メガネなしで、ぼんやりとしか見えない生活は非常に不便でした。よい子のみんな。ゲーム、テレビの見過ぎには気をつけてね。 康弘

杉森女子校の幼児食事会(19P)の取材を終えて、試食をさせてもらっている。昨年まで娘が通っていた幼稚園のお母さんたちが教室へ「あちこち取材も大変ですね」「いえ、今日はおいしい取材でした」 強

のどが弱いので、外から帰ると必ず、うがいをお願いします。口から出るくらい舌を伸ばしながらガラガラやると、のどの奥まできれいにできるそうです。風邪がはやるこの季節、皆さんもお試しください。 和久

干し柿作りも3回目になると慣れたもの。大相撲を聞きながら干した1回目の干し柿は食べきり、2回目のがそろそろ食べごろ。いつも正月には早かったり遅かったり。今年にはナイスタイミングでした。 英一

編集後記